

---

## 16. 町内回遊路を活用し町の活性化とコミュニティの再生（継続2年目）

津屋崎町街並み保存協議会  
(福岡県宗像郡津屋崎町)

---

### I. 活動の背景と目的

#### 1. 活動の背景

津屋崎は江戸中期から明治にかけて、製塩と塩の海上輸送から発展した海上交易により、「津屋崎千軒」と言われるまでに繁栄した町だった。

しかし、明治になって国鉄が町を通ることを拒否したことと、専売制度による塩田の廃止、陸上交通の発達による海上交易の衰退とにより急速に町がさびれ、かつて繁栄した時代の大きな家が次々に解体され、「津屋崎千軒」の面影を残す街並みも影が薄れている。

その上に、近隣にスーパーマーケットなどの大型店舗が進出し、何百店もあった商店や職人の作業場が60店を割り、通りに人影もなく、お年寄りが豆腐1丁を買いに行ける店が近くにない有様になっている。しかも、商店のほとんどに後継者がなく、閉店は時間の問題だと言われている。

明治34年(1901年)に建てられた「藍の家」は、60余年前に廃業した藍染店の住居だった家で、現代生活には不適だと新築の住居に移られ、6年前に空き家になった。個人で補修して維持するには負担が大きくてできない、解体して駐車場にするという話を聞き、「津屋崎の自然と開発を考える住民の会」「郷土史研究会」「文化協会」「商工会」「観光協会」「区長会」の6団体で「街並み保存協議会」を結成し、「津屋崎千軒の面影を残す貴重な建て物で、町の文化財でもあり、歴史の証人として是非保存を」と町と町議会に働きかけ、1年後にやっと「町が管理し街並み保存協議会が運営する」ことで保存が決まった。

当初、町は集会所公民館にとの意向だったが、町家の民俗資料館の方が、より有効な使い方だと考え「津屋崎千軒民俗館『藍の家』」という名称を付けた。さらに活用方法や町の活性化を学習・討議して、この家を公開すると共にもっと活用して町の活性化に役立ててこそ保存の意義があると、平成6年3月に「津屋崎現代美術展」を開催し、以後3年間、津屋崎の地域性を発揮しながら集客力のある催しを工夫しつつ歩んできた。

#### 2. 活動の目的

文化財であり歴史の証人である「藍の家」や津屋崎千軒の街並みを保存・再生することにより、衰退している津屋崎町の活性化をはかり、活性化により街並みの再生が可能となる二つの目的をもっている。そして、若者たちが後継者となって、さらに豊かな住みよい町になるようにしたいと考えている。

### II. 活動の内容

#### 1. 津屋崎千軒回遊路と「あけぼの」

(1) 昨年度に設置した回遊路の充実と活用を目指したが、交通の邪魔になり、景観を損なうのを心配して道標を小型にしていたが、小さ過ぎて目立たないので2倍以上の大きさにし、区名と旧町名を記入し、黄色の矢印を入れて分かりやすくし、数を増やした。また、史跡、寺社の案内と地域ごとの案内板も制作した。これらを合わせて70枚を

制作・設置した。

しかし、これらの道標は町内をよく知っている者が作ったので、町外から訪れる方には不親切で、中には迷った。分かりにくいとの苦情が未だかなりある。

また、道路が狭く、案内板の設置場所がなかったりするので、もっと工夫・研究をしなければならない。

- (2) 回遊路に伴う大きな問題は、「藍の家」の専用駐車場がないことで、道の分かりにくいことも、駐車場のないことの方で困っている。

「藍の家」の直ぐ近くに大きな道路が建設中なので、これが出来上がると豊村酒造の樽干し場が駐車場として使えるようになり、貸し貰えるようになるので、いま少しの辛抱ではある。

また、一方では行政に働きかけて、町内のあちこちにある空き地の活用を進めるようにもしている。

- (3) 町内の中心部にお茶を飲む所も休息できる場所もないので、回遊路の一つの拠点として設けた茶店が、0157騒動もあって、イベントの時の無料休息所としてしか使えず開店休業状態だったが、

①年間1～2店が閉店している津屋崎の街並みに刺激を与え、閉店のせめてもの歯止めとすると共に、地場産業が興るように物産販売を盛んにする。

②地域住民の交流の場として、新しいコミュニティ発生のひとつの拠点とする。

③昨年3月まで、催しのない平日は休館していた「藍の家」を毎日開館できるようにする。

の3点を目的として昨年3月29日から改めて〈物産販売所「あけぼの」〉として開店した。しかし、売上が少なく、従業員の時給へのしわ寄せー減給という形に追い込まれながらも1年間閉店もせず持ちこたえ、ようやく赤字ー減給がなくなろうとしている。(「あけぼの」は独立採算制で運営している。)



津屋崎千軒街並み探検ラリー

- ・お盆の4日間と正月の9日間を休館した以外、目的③の「藍の家」の《毎日開館》を実行したので

a, 町内全般にもようやく「藍の家」の存在が知られ、町外では津屋崎といえば「藍の家」と言われるようになってきて、平日の来館者数も最低10人はあるようになってきた。バスツアーの企画が、JRと観光協会との共催で行われ、国民宿舎などの企画のものもあるようになり、今春には40～50人の団体が度々入るようになって

た。

平日でも、町なかを地図を手にして歩く人を見かけることが多くなってきている。

b, それに伴って「あけぼの」の売上げも伸びてきている。

c, 一方では「あけぼの」に商品として委託される町内の方の手作りの品物が増え、品数も多くなっている。

委託されている品物をざっと上げると、野菜や果物などの農産物と味噌、漬物、ジャム、砂糖漬けなどの加工品。干し魚、干しわかめ、味海苔、干しひじきなどの加工海産物。婦人帽、手提げ、袋、お手玉などの布製品。折り紙雛、壁飾り等の紙や木の加工品。竹籠などの竹細工。陶芸同好会からの陶器類。廃油を利用した石鹸やゴキブリだんご。貝細工。そして余剰金の寄付。

海産加工品と味噌以外は趣味や内職として作られているが、これらが地場産業に発展することを夢みている。

これに加えて、町外からの出品も増え、ガラス工芸、陶芸工房からの委託もある。

d, 「藍の家」以外の観光の目玉として、一昨年オープンした「あんずの里ふれあい館」が新鮮な農産物の直売場として人気を呼び、土日は駐車できない車で混乱しているほどになっている。

また、「藍の家」の隣に昨年6月からオープンした「津屋崎・組み木人形夢会館」も人気を呼び、自分も作りたいと会員になる人が次々にあり、参観者も多く新しい目玉になっている。

個人のコレクションを公開して下さる家もあり、サーカスの看板絵を描いていた町出身の民衆画家の存在も最近判明し、津屋崎町在住の画家や彫刻家も多く、津屋崎の存在をアピールする一つの力になりそうである。この画家たちで、新酒祭りに開館した「街角美術館」の建物がよいから、年に2～3回は自分たちの作品展示会をしたいという希望も出ている。

・観光協会を中心に商工会、区長会などが街並み保存協議会と協力し、「津屋崎千軒いきいき夢の会」を結成して新しく町おこしに取り組もうと歩み始めている。

その最初の取り組みが、この4月に行った「新酒祭り」である。そして町も予算を出し、職員もこの催しには熱心に取り組んだ。

「新酒祭り」は2日間で2千人をこすお客があり、まだ不十分な点は沢山あるが大成功だったと言える。そして今まで無関心だった町内の人にも「よかったねー、来年もまたしてもらわないかなー」と喜んで下さった。

・以上のような進展をしてきているので、後は、この取り組みに参加する人がどれだけ増えるか、若い人がどれだけ参加するかに懸かっているが、今後の取り組みに希望が持て、力が湧いてきている。

・今後は、町内の食堂や各商店街がこれらの町外から訪れるお客さんの存在を認め、十分にもてなし、満足してもらえるように早急に工夫し、対応できるようになることが必要になってきている。

## 2. 「藍の家」の取り組み

・97年度は展覧会を4回と、スケッチ会、野染め制作会を各1回。琵琶の演奏2回とフルートの演奏会を1回、企画・実施した。これに「藍の家」を貸し会場として展覧

会が3回あり、かなり充実した1年間だった。

- ・98年度も、すでに2件展覧会をしたいという申込みがあり、「藍の家」の利用者が増えることを期待している。
- ・財政的な理由で個人への案内状の郵送を控えたので、96年度より来館者は少し減ったが、報道機関のどこかが必ず報道するようになり、街並みを含めて今年になってTVQやTNCなどの取材も次々にあるようになった。その結果、津屋崎町と「藍の家」が注目を集めている。意して見、聞くようになって来ている。
- ・「藍の家」の発足当初から町に申し入れていた「藍の家」の運営費の町での予算化が98年度からようやく実現し、150万円の予算が採れるようになった。これで経済的な心配はせずに「藍の家」の運営ができるようになった。
- ・「玄海グリーンライン・散策スタンプラリー」が97年12月1日から発足し、こちらからも来館者が少しずつ増えてきている。
- ・先進地視察では多くのものを学んだが、後半の参加者が予定より減ったために、その余った費用で、予め計画していた
  - ①「藍の家」の協賛店用の小のぼりの新調作製。
  - ②「藍の家」の記念和手拭いの4号作製。をし、宣伝とお土産の充実に役立てた。



野染め制作会

### Ⅲ. 津屋崎町街並み保存協議会について（今後の課題）

「藍の家」の運営費が町の予算で組めるようになり、経済的な負担は軽くなったので、今まで不十分だった町おこし、町づくりの学習を、いきいき夢の会と連携を取りながらしっかり行おうと考えている。

会員の高齢化が進み、「藍の家」の宣伝活動、催しの準備、会場当番などの運営に当たる人員の確保が困難になってきている。しかしながら、いきいき夢の会などでも街並み協議会は依然として中心的な存在なので、会員の拡大、特に若い人の確保が急がれる。

どのようにして若い人を確保するかが、街並み協議会だけでなく全町的にも重要な緊急課題である。